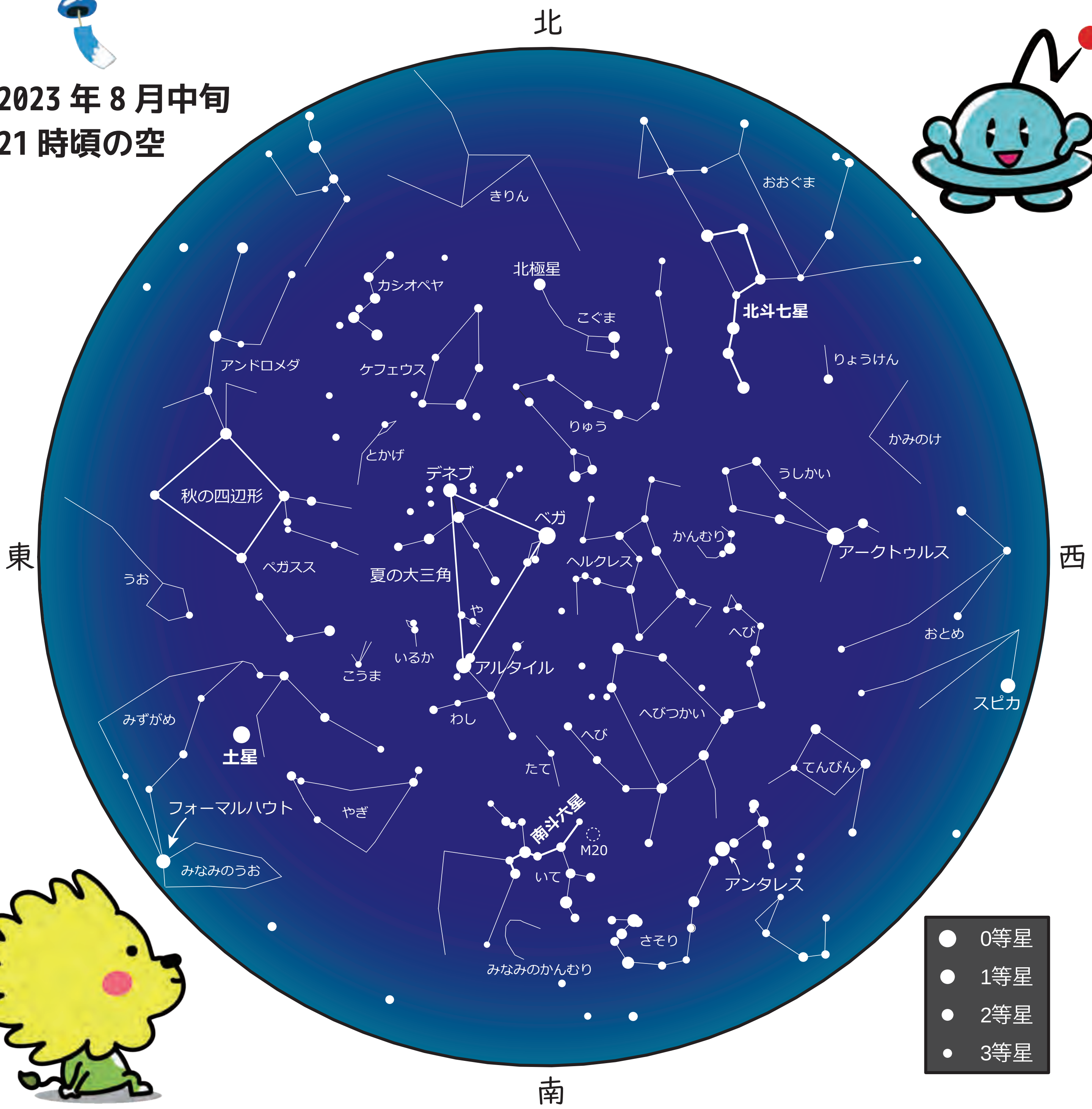
阿南市科学センター

8月の星空案内

**2023年8月中旬
21時頃の空**



暑い夏の日々、夜空を見上げれば頭上には**ベガ**（こと座）、**アルタイル**（わし座）、**デネブ**（はくちょう座）をつないでできる**夏の大三角**が見えています。夏の大三角の中には、「や座」と呼ばれる小さな星座があり、約7倍程度の双眼鏡で観察すると、視野いっぱいに矢の形を見つけることができます。一方で南よりの低い空には赤色の1等星を従える**さそり座**が見え、その隣となる東側には**いて座**が位置しています。いて座には北斗七星とよく似た「**南斗六星**」という星の並びがあり、南の空が開けた場所で探すと良いでしょう。なお、東よりの空には秋の星座たちが昇りはじめ、みずがめ座のあたりでは**土星**の輝きが見つかります。当館の天体観望会では8月中旬以降から21時の回で土星の観察ができます。

天体観望会のご予約はネットかお電話にて　【毎週土曜日開催 / 19時～，20時～，21時～】

阿南市科学センター　電話 0884-42-1600　http://ananscience.jp/science/

■ 8 月の月の満ち欠けと惑星について

満月
2, 31 日

下弦
8 日

新月
16 日

上弦
24 日

天体観望会で
月が見えるおすすめ日時は？

8/26(土) : 全ての回で観察可能

水星 ：上旬の日没後、西のごく低空で見える（8/10 東方最大離角）【0.4 等】
金星 ：太陽に近く、観察は難しい（8/12 内合）【約 -4.0 等】
火星 ：日没後、西のごく低空に位置するが観察は難しい。【約 1.8 等】
木星 ：後半夜前に東の空から昇り見えはじめる【約 -2.5 等】
土星 ：前半夜に東の空から昇り見えはじめる（8/28 衝）【約 0.5 等】

※各惑星の等級は中旬頃の明るさ（水星のみ 8/10 頃の明るさ）。

8 月 31 日は年内最大の満月！

月の軌道は楕円になっているため、地球との距離は最大で約 5 万 km 変わります。そのため同じ満月でも距離によって見かけの大きさが変化します（最大で 1 割程度）。

図 1: 2020 年における最大・最小の満月の大きさを比較 .

■ 注目の天文現象

【ペルセウス座流星群が好条件！】

2023 年のペルセウス座流星群は、日本では 8 月 13 日の晩から未明にかけて最も多く出現すると予想されています。今年は月明かりの影響がほとんど無く、最高の条件で流星観察が行えます。空の暗いところであれば、1 時間に数十個の流星が観測できるでしょう。

流星群の観察を行うさいは、なるべく空の開けた場所で、寝転がるなどして楽な姿勢で見あげましょう。放射点から離れた場所にも流星は流れるので、放射点にこだわらず、空全体を見渡すのが観察のポイントです。

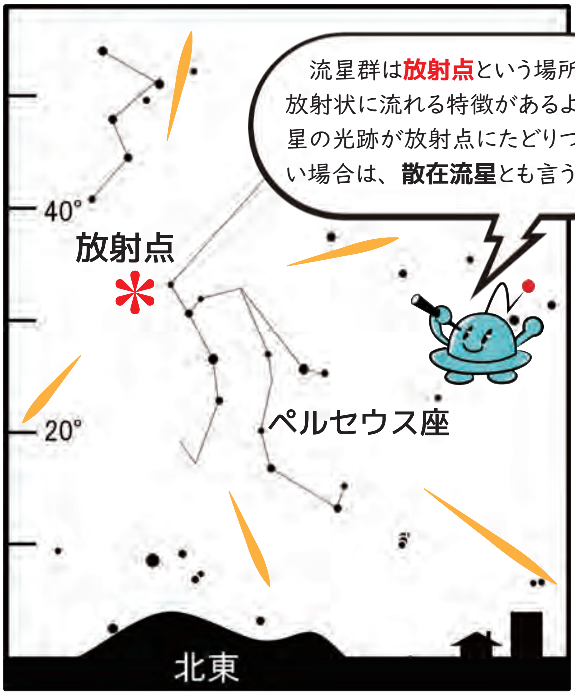


図 2：ペルセウス座と放射点の位置
（8 月 14 日 0 時頃の夜空）

■ イチオシ天体写真

【いて座で輝く M20 三裂星雲】

図 3: M20 三裂星雲 .
（D=25.4cm, F6.3 + ASI294MC pro, by K .Imamura）
※この写真は一般財団法人全国科学博物館振興財団の支援を受け撮影しています。

夏の天の川の中には数多くの美しい星雲が分布しています。今回紹介するのは、その中でもいて座にある M20「三裂星雲」という天体です。写真に撮ると赤と青の 2 色の星雲の姿が浮かび上がり、天体写真家の間では大人気の撮影対象です。赤色の星雲には黒い筋が走り、まるで星雲が裂けているように見えます。この見た目が三裂星雲 (trifid nebula) という愛称の由来になりました。しかし、写真をよく見ると、裂け方は 3 つというより 4 つで、宇宙の四つ葉のクローバーに見えなくもないですね。なお M20 は星形成領域といって新しい星が誕生する現場としても知られています。天文学者たちは目に見える光以外に、電波、赤外線、X 線など、様々な電磁波で観測・研究を行っています。